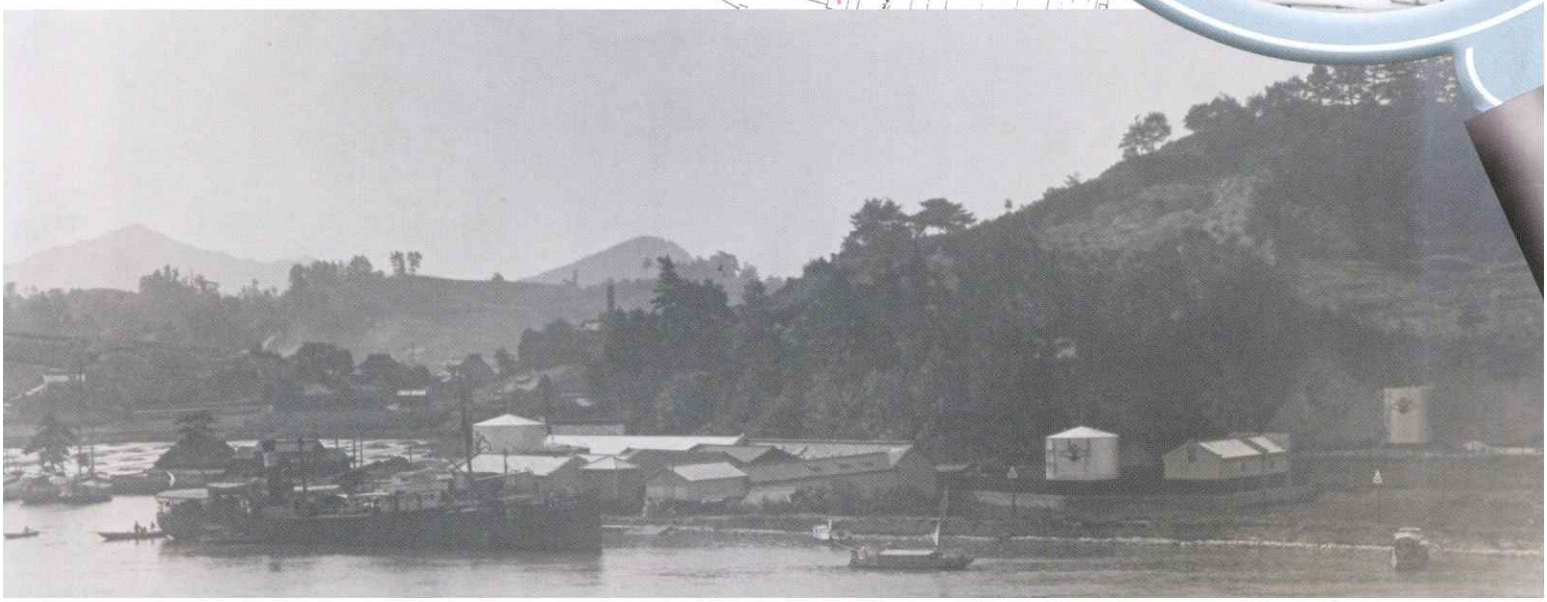
創業百六十年のあゆみ

広川今昔物語



ごあいさつ
「広川今昔物語」について

平成29年5月28日、広川グループは創業160周年を迎えることが出来ました。このことは全て、お取引関係先の皆様、地域の皆様、そして諸先輩方の永年に渡るご支援、ご愛顧のおかげでございます。皆様方に深く感謝をいたしますと共に、これからも引き続き、より親しくお付き合いをしていただける会社となることをお誓い申し上げます。

この様な気持ちを少しでも著したいと「広川今昔物語」を改定創刊いたしました。何卒、お気軽に読み流していただければ幸いに存じ上げます。

平成29年5月
広川グループ代表
廣川　正一

古寺が連なり建つ尾道は、港町、商業の町として古くから栄えた

尾道は、白鳳、天平、平安の七～八世紀に建立されたという大きな寺々が山腹に連なり、瀬戸内海のほぼ中央部に位置した屈指の要港として、古くから栄えた商業の町である。

十二世紀には、大田庄（荘園）の積み出し港として倉敷地（年貢などを輸送する際、中継地として一時保管した場所）が置かれ、宋銭が流入した鎌倉時代には、市場が発達し、有力商人も誕生している。

かの有名な三島村上水軍の拠点の一つである因島が目先にある。かつて村上水軍が海上の権力を握っていたことからもわかるように、瀬戸内海は東西の交通の要所であった。秀吉の「海賊行為禁止令」や「刀狩りの令」が出された頃からは、商業や廻船業が一層発展してくる。その当時は、陸路の方が危険で難儀であり、穏やかな瀬戸内海の海路が主な交通手段であった。参勤交代の諸大名も、船列を組んで、家紋を染めた帆を尾道沖になびかせたという。

寛文十二年（一六七二）、「西廻り航路」（江戸時代に日本海沿岸の港と大坂を結んだ幹線航路。日本海を西へ航海し、下関から瀬戸内海に入り大坂に達する）が開かれてからは、「北前船」が出入りするようになり、北日本の米、材木、海産物、肥料等を売りさばき、帰り船は尾道附近の特産物である塩、畳表、錨、酢、生魚、石細工などが積み出された。この頃から、尾道の人口は飛躍的に増加し、問屋が軒を並べてくる。（ちなみに尾道の人口は、当時四千人弱。明治の初めで一万五千人前後。全国の人口は明治の初めで三千万人くらいだった。）

しかし、幾度かの合戦で軍費、物資を調達せねばならず、飢饉が相次いだことにより藩の厳しい年貢、運上銀の取り立てにあったりして、さすがの尾道の豪商も次々と姿を消したり、新しく生まれたりの繰り返しであった。

時勢は移って、嘉永から安政（一八五四～一八五九）の頃になると、「外に黒船頻りに至り、内に尊皇攘夷の叫び高く、江戸幕府の命運も、日一日と大詰めを迎え、天下は正に動かんとする形勢」になってくる。

福本屋玉助が、福玉の屋号で、諸油乾物商を開業する

万延元年（一八六〇）三月、桜田門外の変で井伊大老が謀殺された。その三年前の安政四年（一八五七）五月二十八日、平田桂助が、福本屋玉助（通称、福玉）と号して、尾道の十四日町に、諸油乾物商を開業した。これが広川株式会社の源である。

当時の〝福玉〟は、主に薪炭を取り扱っていたが、平田桂助によって、灯り用菜種油・線香・ローソク・箸などの雑貨や、ロープ・綿布などの船用具、さらには乾物等の食料品など、幅広い商品を取り扱うようになった。

もともと平田桂助は、御調郡梶山田村（現在の尾道市原田町）の大農家の二男で、平田姓は、当時禁じられていた苗字を秘かに用いていたものらしい。

そして、以前から尾道で開業していた福本屋の五代目、廣川嘉十郎が、二女シウ一人を残して子供に先立たれていたので、養子縁組という形でこの福本屋を託された。おそらく、嘉十郎の娘シウと桂助の子、久助の許嫁の約束もあったらしく、後に夫婦になっている。

菩提寺である正授院の過去帳によると、さらに百二十三年さかのぼって「初代福本屋廣川市右衛門享保十九年（一七三四）八月三十日没」とあるが、命日以外の何一つ不明なので、明治五年に定められた戸籍簿ではっきりしてくる平田桂助を、広川創業の祖と定めたという。

広川発祥の地 尾道全景

正授院にある廣川家の墓

正授院

二代目 廣川 久助が、明治の動乱期を乗り切る

「福玉」創業後十二年にして、玉助は没し、二代目廣川久助が二十五歳で後を継ぐ。

封建社会、維新の混乱、そして文明開化の進展と、目まぐるしく変遷する中を、寝食を忘れて勤勉に働き、とにかく家業を守り抜いた。

二回目の長州征伐から鳥羽、伏見の戦い（明治元年）と戦乱が拡大し、芸州藩と長州藩の鉄砲隊が尾道の寺々に分宿、軍艦「まりふ」が入港して、徳川譜代の福山城を攻落させている。この時も尾道の豪商は、軍資金や軍需物資を供出して協力しているが、経済的には超非常事態に陥った。

しかし、この艱難辛苦に耐えて、やがては、新生尾道の黎明を迎えることになる。

明治十一年には、国立第六十六銀行（広島銀行の前身）が尾道で産声をあげ、住友銀行も全国一号支店を出店。大阪商船、住友汽船の大きな鉄船が、尾道港を拠点にして出入りする。明治二十五年には山陽鉄道が開通し、そして明治三十一年、広島県では二番目の市制が施行され、尾道市が誕生した。

三代目 廣川 久助（鹿松）が業容を拡大、隆盛へ導く

明治三十七年の暮れ、日露戦争の真っ最中に、二代目久助が隠居し、その長男鹿松が弱冠二十三歳にして、三代目久助を襲名した。広川株式会社の今日の繁栄を築いたのはこの人である。

三代目久助は、幼い頃から、尾道に出入りする帆船が石炭や石油を燃料とする機械船や鉄船に変わり始めたことを見ており、自動車の普及が大都会で始まったことを聞いて、石油時代の到来を予見した。早速、英国サミエル商会と交渉し、特約権を獲得し、スタンダード、小倉石油（日本石油の前身）と特約契約を結んでいった。

自家用運搬船も、機帆船（発動機と帆を備えた小型の木造船。主に内海・近海の貨物輸送に用いた）に切り替えて、販路を大阪から九州へと拡大していった。千鳥丸という㊇マークの機帆船、油槽船（ガソリンや石油などを貯蔵する大きな入れ物を積んだ船、タンカー）がピーク時には三十数隻あって、瀬戸内海を走り回っていた。

昭和十年、満州国誕生の祝賀に国中が湧き上がっている時、直ちに日本と満州の国旗に各々の国花をあしらってデザインしたラベル（石下写真）を特許庁に商標登録した。これを大同ローソクに貼り、西日本一円に売りまくり、二十数名のお得意様を満州旅行に招待している。

三代目久助は大変な愛国者で、「お国の為」が口癖で、三男（陸軍中尉、昭和十四年日中事変で戦死）の戦死通報の電報を掲げて、「よくやってくれた」と家中を飛び回ったという。

一文の銭も惜しみ、古縄もより直して使用する倹約家でもあった。会社の会計は自ら掌握し、几帳面に管理した。

ベルベット石鹸の振子時計と巾着袋

大同ローソクのラベル

艮神社に残る寄進者芳名碑

浄土寺に残る寄進者芳名碑

その反面、公共事業や、寺社、祭などの行事には、快く大金を寄付し、困っている人には無担保で融通した。子や孫の教育費も惜しまなかったという。

「先んずれば制す」をモットーに、誰よりも早く起きた。早朝に海岸通りを歩き、郵便を私書箱から取り出すのが日課であった。また、早朝から竹箒で隣近所から遠くまで掃除をし、水を打って回るので、町内の人も早起きして箒を持って飛び出したという話もある。信義、信用を重んじ、約束を破ることや怠慢、偽り言には誰彼なく烈火の如く怒り、その声が中浜通りに響き渡って尾道の名物になっていたというから、近所の人もこの「カミナリ」を恐れていたようである。

反面、精一杯努力した結果の不始末には拍子抜けするほど寛大で、自ら手助けして諭した。当時のことゆえ、たいした学校教育は受けていないが、近所の浜問屋（海岸に建ち並んだ海産物を取り扱う問屋。「尾道千軒」として繁栄したという）や沖仲仕（船舶内で貨物の積み降ろし作業に従事する港湾労働者。船内荷役作業員）から頼まれると快く契約文や手紙を書いてやり、帳簿の相談にものった。周囲や部下から「大将」と呼ばれて親しまれた。

昭和八年帝国興信所発行の「尾道大鑑」には、「尾道の三商人と謳われ、稀に見る勤勉家。関西に於ける油界の重鎮として、斯界に一頭地を抜く信用あり。日本石油に於いてすら大阪以西、二位の販売高を見せ、スタンダード、大同マッチ等の特約店として、今や中国、四国、九州にその駿足を伸ばし、尾道の福玉商店として、郷土のため萬丈の気焔を吐けり。経済方針極めて大胆にして、反面ぬかりなく準備を藏して、時期を見ての攻防進退の妙は多年商戦裡に馳駆せし同店の家宝で幾多同業者の追随を許さざるものあり。今日真に同店の前途洋々たるものあり」と紹介されている。

尾道大鑑

石油類商
福玉商店 店主 廣川久助 氏
尾道市十四日町

一百年前福本屋玉助氏開業せるものにして先々代久助氏は縣下御調郡原田町の出身にして當市三商人とまで謳はれた成功者であるが現主亦乃父を傷けず稀に見る勤勉家で自ら第一線に立ち寧日なく、氏繼承後益々発展し関西に於ける油界の重鎮として斯界に一頭地を抜く信用を有し、日石関係に於てすら大阪以西一、二位の販売高を見せ、スタンダード、大同マッチ等の特約店として今や中國、四國、九州にその駿足を伸ばし尾道の福玉商店として郷土のため萬丈の氣焔を吐けり。
経営方針極めて大膽にして反面ぬかりなき準備を藏し時機を見ての攻防進退の妙は多年商戦裡に驅馳せし同店の家賓で幾多同業者の追随を許さざるものあり。近年販路擴張に伴ひ九州方面統轄店として下関に株式會社福玉商店を設け顧客に資せる同店今後の活動も想像に難くないが時勢の進運に伴ひ海陸共に年々油類使用率増加しつゝある今日眞に同店の前途洋々たるものあり。鶴湾の東端に聳へ立つタンク㊇の運送船も共に商港にふさはしい一景である。

3代目社長 廣川久助が「尾道大鑑」に紹介された原文（昭和8年帝国興信所発行）

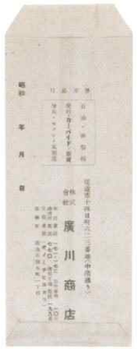
四代目 廣川 政太郎
戦中戦後の統制経済を乗り切る

四代目政太郎が尾道商業二年生だった大正五年、福玉商店は全焼し、女中さんが死亡した。その女中さんの位牌は、今でも廣川家代々の仏壇に懇ろに安置されている。

その火災の翌日から気丈に再興の指揮をとる父久助の姿を見、厳格な父の薫陶を得て、政太郎は不屈の根性と鷹揚な包容力を身につけた。のちほど石油、食油、石鹸、マッチ等の多くの統制会社、配給組合の要職に就いた時には、見事なリーダーシップを発揮している。

さて、二・二六事件から日も浅い昭和十一年三月十二日、福玉商店は、株式会社廣川商店（社長久助、資本金百万円）に法人化した。この頃から戦時経済統制が強化され、切符制がとられて、民需は極端に制限されていく。昭和十四年には、日本石油との販売特約契約を破棄して、販売業者を吸収して設立された府県別石油会社へ統合された。広島県は、廣川商店を核にして統合されたので、大都市である広島市から小都市の尾道市へ赴いて切符を得ることに不満の声も出たという。多くの統制会社の要職に就いた政太郎は、東京、大阪、広島の監督官庁、製造会社、配給事務所へと出ずっぱりになり、幼い頃の滋は、父の顔を見ることはなかったと回想する。

政太郎がその旅先で覚えた囲碁と麻雀は、非常に早打ちで、相手が数秒間でも間をとると畳をひっかいて急がせた。右手に碁石を鷲づかみにして置いていき、相手が「待った」でもかけようものなら、その間に二、三目の石が打たれていて、元に戻すのに苦労した。麻雀は負けっ振りが良いので、大阪の日本石油や日本油脂からも頻繁におよびがかかった。

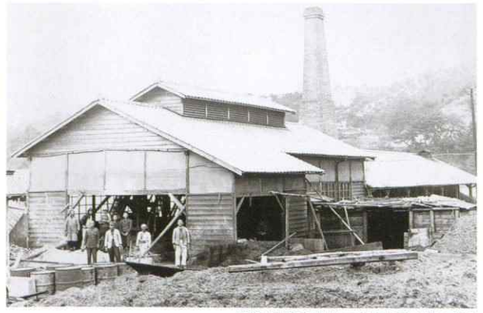


昭和11年、法人成り前後の封筒

豊年製油の木製大掛額

そして運命の昭和二十年八月六日、原爆の閃光が、広島市を一瞬の間に焼土と変えた。廣川商店は、昭和十四年から広島市楠木町（現在石油倉庫）で「山陽煉炭」を製造販売していたが全滅し、原料である石炭の山は、三週間もくすぶり続けた。運搬用の馬車の馬五頭も死んだ。

長男の正雄（後の五代目社長）は、その時広島高等工業（現広島大学工学部）の学生であった。ピカッと光った瞬間、地に伏せ、幸いにも校舎が陰となって助かったが、気がついて起き上がると、まわりの友人は皆死んでいた。それから炎の街をかいくぐり、その日の夕方、廿日市町の親戚に血だらけになって辿り着いた。通信が途絶えて、尾道の両親が我が子の無事を知るのは数日後になる。



昭和初期の煉炭工場（広島市楠木町）

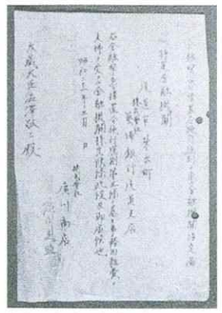
政太郎は、従業員と我が子の生死を心配して、機帆船千鳥丸で広島の宇品に上陸し、焼け野原を丹念に尋ね回った。八月十二日には横川駅の北方の竹藪に仮住まいしている従業員を探し当て慰問した。しかし、女性の一人は一週間後、悲惨なケロイド姿で亡くなった。政太郎は、昭和三十八年にガンで他界したが、家族はこの時の二次被爆が原因であったと話す。

被爆後の百年間は草木も生えないと噂された広島であったが、素早く立ち上った廣川商店は、十月には尾道から資材を運び、堀立小屋を建て営業を再開する。石炭が入手できなかったため煉炭製造は断念し、商品を尾道から千鳥丸で運んだ。遠くは岩国、呉、可部から、リヤカーや大八車を押し、一昼夜をかけて買いに来る客もあった。この頃も三代目久助は「お国のため」「人助け」という言葉をしきりに口にして、物不足による激しいインフレの中、商品の一つひとつに売値を指示し、それより高くも安くも売ると例の「カミナリ」を落とした。

御袖天満宮 再建費寄進者芳名碑

幸いであったのは、石油類食油等が軍から払下げられたことである。尾道が戦災を免れたことに加えて、正義の権化、久助翁の信用と、誠実公平に統制会社を運営していた政太郎社長の人柄が買われたのであろう。

ちなみに、昭和二十年二月八日付、岩国陸軍燃料廠のガソリン百十六屯、金三万六百四十八円六十銭の領収書から換算すると、リットル当たり二十六銭強である。



戦後の金融緊急措置令による届書

株式会社廣川商店 取締役社長

廣川政太郎

株式会社廣川商店の今日の基礎を形成した故廣川久助の嫡子。尊父は家業の油脂類卸売、回漕業を盛んにして次第に事業を拡め、中国地方有数の石油商となった人であるが、現政太郎はこれを継いで同商店取締役社長に就いた人。

尊父は関係諸団体の役員、尾道商工会議所議員を務めた人物である。とりわけ誠実な商法で業界の信用を得たもので尾道商人の亀鑑と評されているが、氏の事業態度にはこの血がつながり実直な商法を行っている。

「運、鈍、根」を座右銘としていることでもこれが肯ける。現在は販路工場、油漕所、営業種目、資本金も規模が大きくなりつつあるが氏の意欲の表れであろう。

ほかに広島県石油販売協同組合顧問をも務め業界の実力者の一人と目されている。前に尾道商工会議所議員にも選ばれたこともあり、又ライオンズクラブ会員でもある。

いずれは尊父を超えて石油の広川の名を高からしめるであろう。

趣味は釣り。
県立尾道商業学校卒。
明治三十六年十一月二十七日生

4代目社長 廣川政太郎が「備後備中肖像名鑑」に紹介された原文（昭和37年発行）

艮神社に残る寄進者芳名碑

五代目 廣川 正雄（まさお）
食品、L・P・Gへと業種を拡大、中途で急死する

被爆しながら九死に一生を得た政太郎の長男正雄は、昭和二十八年頃からめきめき頭角（とうかく）を現し、社内外の信望を集めてくる。専務取締役として営業の第一線を突っ走り、尾道青年会議所や商工会議所、ロータリークラブ、PTA会長の要職をこなして、やがては尾道経済界のリーダーになると目された。

桃印マッチの前掛

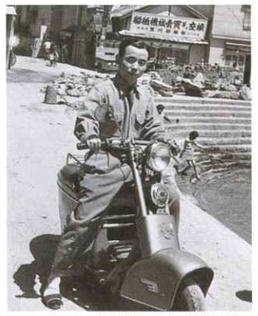
ニッサン石鹸工場

戦後の販売主力商品は、燃料では煉炭、豆炭（まめたん）、カーバイト、食料品や日用品では豊年やニッカの油、マヨネーズ、マーガリン、高野豆腐、ニッサン石鹸、桃印マッチなどがあった。陸上輸送の手段は馬車やマツダのバタンコで、社員が大八車や自転車、単車に乗せて売って回った。

昭和三十年日本石油ガスが設立され、日本最初のプロパン用タンクローリーが走り始めた。直ちに廣川もプロパン販売を手掛け、昭和三十七年には、尾道に大型のL・P・Gストレージを設置し、後には、ボンベの検査、修理、充填（じゅうてん）の工場を増設していく。

港内給油船 第26千鳥丸（木造タンク船）

重いボンベを持って、尾道の坂道や石段を登るのは骨が折れる仕事であったが、薪炭の不便さから解放されて喜ぶ主婦の顔を見ると疲れもふっ飛んだ。燃料革命の波に乗り、松下電器、日立家電等の暖房器、厨房用品の販売も拡張していった。この頃、物流の主役をトラックなどの陸上輸送に譲るまで、自社船の「千鳥丸」は海上輸送で活躍していた。南氷洋の捕鯨に活躍した捕鯨母船「図南丸（としなんまる）」（捕鯨に従事する何隻ものキャッチャーボートの母船として燃料などを積む）に、燃料を納入した。また、社員四、五十人を乗せ、小豆島や琴平（ことひら）などへの社内旅行にも使われた。


昭和31年頃の正雄社長

さて、それまでの廣川商店は、いわゆる「油屋」と呼ばれ、石油と天ぷら油が売上高の八十％以上を占めていた。正雄専務は「お客様が持参する容器に、天ぷら油を量り売りする時代は終わる。これからは、生産元詰されたものが、一般食品の小売店やちらほら出現し始めたスーパーストアで売られる時代になる」と予測した。となると、一般食品の販売業への進出は急務であった。

株式会社 廣川商店時代の正雄社長

昭和三十四年、マヨネーズ、ケチャップ、そして桃やみかんの缶詰を、「コクサン」印の廣川ブランドにして華々しく食品業界へ船出した。マネキン、宣伝カー、料理教室のPRにも力を注いだが、有名ブランドには太刀打ちできず、返品が相次ぎ、缶詰は相場に振り回された。素早く完全撤退し、二年後に出直すという回り道をしたが、ここから本格的進出が始まった。森永製菓、SB食品などのメーカーと次々に特約していき、三年ごとに売上は倍増した。たちまち中国地方の有力問屋に押し上がり、昭和四十年代には、広島、尾道、倉敷へと、大型倉庫を新築していくことになる。

この頃、マイカー時代へと突入し、石油の需要は急カーブを描いて増大した。広島では初となる横川給油所など、広島・岡山間に給油所を六カ所増設し、現在はお得意先の給油所も合わせて約八十カ所以上となり、中国地方一位のサービス網を作り上げていった。

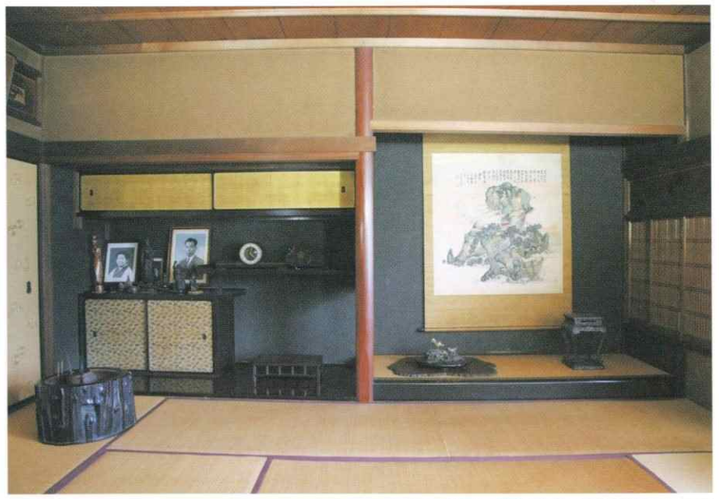
昭和三十八年十一月には、父政太郎の後を受けて正雄が社長に就任し、昭和三十九年四月には「広川株式会社」に商号変更して、新生広川は出発した。

ところが、その矢先の昭和四十一年六月、正雄は、開通したばかりの名神高速道路で、三十八歳の若さで事故死する。

偶然とはいえ、三代目の祖父久助（享年八十歳）が昭和三十五年、四代目の父政太郎（享年五十九歳）が昭和三十八年と、経営者が三代にわたり、三年ごとに相次ぎ他界するという不幸が廣川家を襲ったのである。

大広間に飾られる犬養木堂筆「百年之計樹人」の額

大広間に飾られる宮原節庵の屏風


旧本社二階の大広間（会議や冠婚葬祭に使われた）

六代目 廣川 滋、経営の近代化、営業の専門化をめざす

五代目正雄社長の急逝を受け、昭和四十一年七月、兄正雄社長の補佐役をしていた五男滋（昭和十年生まれ）が六代目社長に就任、日華油脂に勤務していた四男節雄（昭和九年生まれ）が呼び戻されて、代表取締役広島支店長に就いた。この四男五男のコンビがまず考えたことは、経営の近代化、営業の専門化であった。

広川の組織は、広島、尾道、福山の地域別営業体制をとっており、石油、食品、ガス等の異業種が入り混じった経営を行なっていた。尾道本社が絶対的指揮権をもつ中央集権体制で、古い体質を随所に残していた。これを石油、給油所、食品、プロパンガス、住宅設備機器の商品別営業部制に組織を改革して、専門化を促した。幸い伝統のある企業の強みで、優秀な人材に事欠かず、権限も大幅に各部門に移譲された。滋社長は権限委譲が何にもまして良い人材教育であると言う。

1966年（昭和41年）5月、社員旅行で沖縄へ

広島市の興隆もめざましい。百万都市に近づいてくると、多くの仕入先が広島市に支店や営業所を開設し、情報は広島に集まり広島から流れるようになる。確かな情報を一時も早くキャッチして、素早く営業活動に反映していくことが、問屋の生死の鍵である。

こうして昭和四十七年四月、尾道本社を広島市西区横川町に移転した。滋は、創業の地尾道から本社を移転することに先祖はどう思うだろうかと迷ったが、「会社の発展永続のため早くしなさい」と仏壇から声がしたと、信仰篤い母タツ子（昭和五十四年没）から励まされている。

滋社長は、久助のワンマン経営とは百八十度逆の経営をめざした。「自主、自立、自律、自発、自動、創造、積極、意欲、民主、柔軟、敏捷、個性」これらの文字をかき混ぜて、摺り潰し、その搾り汁をみんなで飲む。個々人が、小グループが、自分の思い通りに動いて、全力を出し切る。しかもそれらが、会社全体と調和して、ひとつにまとまっているこという意味での「ホロン経営」を理想とした。

波乱に満ちた滋社長の時代

六代目滋社長の時代は、決して優しい商業環境が続いていたわけではない。しかし、取引先の尽力も得ながら着実な歩みを残した。第二次石油ショックが到来するが、この時も真の商人魂を発揮して、広川は新規得意先を増やしている。売り惜しみ、便乗値上げの悪徳商法が社会問題化するさなか、広川は、過去の実績を勘案して手持ち商品を公平に割り振りし、お得意先の品切れを防いだ。注文をもらいながらもそれを少なくしてくれるように頼み、納得を得るのは本当に辛く苦しいことであった。そればかりか、品切れで泣きつく新規のお客様にも、仕入先や古い得意先に頼み込み、少しずつ納期をずらしたり早めたりし、営業所間で細微に融通しあって、親身の世話をした。たとえこの間調達が不能になっても、誠意を感謝され、これを機に二十数店が新規得意先になっている。食品倉庫は、長期在庫までも一掃され、初めて放水しながらの床掃除ができたことを喜んだ。「お得意先あっての問屋」とは、言うは易しい。広川は忠実に実行し、地味であるが、コツコツと積み上げていく体質を持ち味としている。

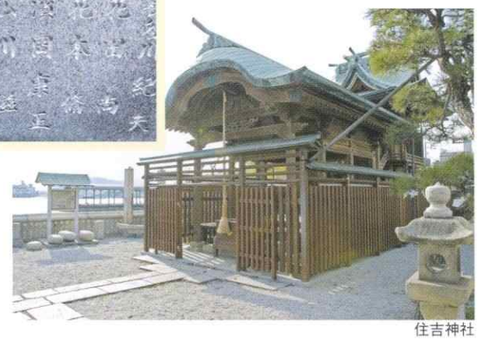
尾道市公会堂に残る寄進者芳名碑

昭和四十三年、米国ドルショックにより為替変動相場制に移行（昭和四十五年一ドル三百六十円）。四十六年スミソニアン体制（一ドル三百八円）。四十八年変動相場制へ。

昭和四十八年十月、中東戦争勃発に始まる第一次石油ショック（日本向けの石油輸出削減→トイレットペーパー買いだめ→狂乱物価→インフレ）、続いて第二次石油ショック。ガソリン価格も一リットル八十円から百七十円になり、また九十円に戻したりと大幅に動いて乱調をきたした。その上、安売りに拍車がかかり、広川グループの石油販売店、ガソリンスタンドなど、広川の経営に重大な影響を及ぼすのである。この中にあっても、冷静沈着な判断により、グループの維持、調整をし、そして拡大へと進めていったのである。

住吉神社

住吉神社に残る寄進者芳名碑



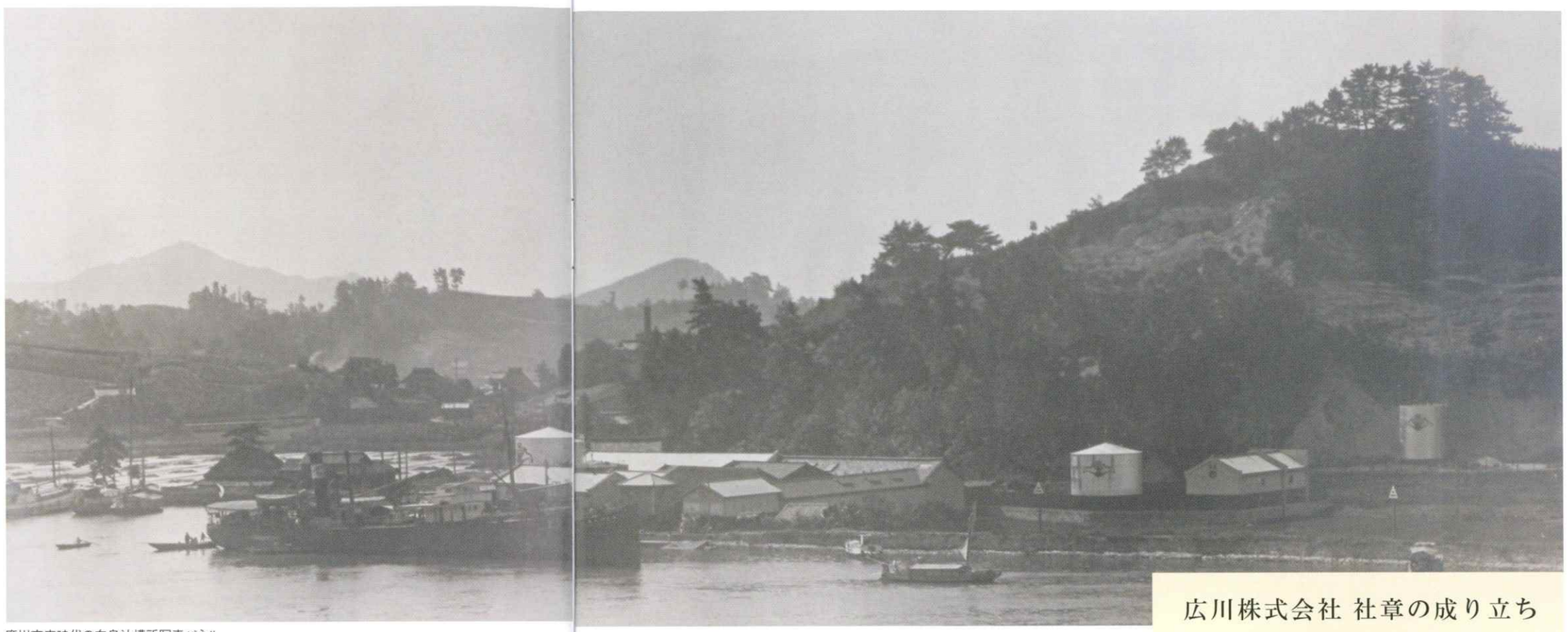
こうして昭和五十七年には、売上高を二百三十二億円に積み上げた。

昭和六十三年、広川は創業百三十周年を迎え、新たなスタートを切った。二月には、センチュリー日石株式会社を

御神天満宮 再建費寄進者芳名碑

御神天満宮

尾道向島油槽所


廣川商店時代の向島油槽所写真パネル

開設。また、三月にはプライベートブランド商品の充実のため、小分け袋詰め工場ヒロカワフーズ株式会社を設立した。

この年三月に、青函トンネルの鉄道開通、四月に瀬戸大橋開通と、明るいニュースはあるものの、円高不況（ドル百三十五円）の影響による倒産件数は二千件を突破。そして、NTT株上場、株価・地価の高騰、バブルの時代が始まった。世間では天皇陛下の病状に気をかけ自粛ムード一色の年となり、そして九月、陛下の容体が急変し、翌年一月七日、八十七歳で崩御（ほうぎょ）される。

広川株式会社旧本社

広川株式会社 社章の成り立ち

（1）成り立ち

安政4年（1857年）創業後、当時は福玉屋という屋号で諸油乾物商を営んでいた。明治32年、二代目廣川久助が㊍廣川商店と改称し、その後は㊍を屋号として使用した。ところが、昭和42年、若手社員から斬新な社章を定めようとの声が高まり、役・社員が検討の上、現在の社章を決めた。

（2）意義

廣川の「川」の文字から創作し、合わせて毛利元就の「三本の矢」にあやかって「三つの扇」を表示。閉じた中心の扇は、内に力を蓄えて真っ直ぐに大地に立ち、左右の扇は一杯に開いて末広がりに繁栄することを祈願している。

（3）社是

「誠実・真髄（まとも）」
誠実で、そして真髄な商人であること。

時代は平成へ。広川石油株式会社開設

時代は、昭和から平成へ。流通業界、特に食品流通は大きく変化した。

もともと営業の専門化を目指し、食品部・石油部（石油、プロパンガス、住宅設備機器）を商品別営業部制とし、それぞれ独立採算で売上を伸ばしてきたが、石油と食品の商環境はそれぞれの方針に大きく違いが出てきた。

また、バブルの中の日本経済は、土地に対する過剰投資を抑制するため、評価基準の見直しがされ、また地価税が導入された。これを期に、それぞれが分社、独立。「〝アメーバ〟のように二つに割れ元の大きさになれ」この言葉のもと、平成三年に広川石油株式会社を設立するなど分社化、着実に販売量を伸ばし、社長の言葉通り、分社前の元の大きさ（二百三十億円）に向け成長を続けている。

広川株式会社広島支店

広川株式会社岡山支店

広川株式会社食材広島支店

七代目正一（しょういち）社長就任、未来を見据えた事業展開を開始

平成十六年八月、廣川正一が七代目社長に就任する。バブル経済が崩壊し、長い間、激しい変化と厳しい状況を余儀なくされた日本にも、ようやく回復の兆（きざ）しが見え始めた頃であった。

広川が取り組むべき課題は山積みされていた。地域産業の推進役として食料品、エネルギー等の生活物資を中国地方の隅々まで届け、地域に無くてはならないライフラインを築き上げること。そのために、山間部または都市部の空白地帯へも必要とされる全ての商品を確実に届けることが不可欠であった。また、地域社会の、そして商業の活性化を目指し、そこに存在するお店、サービスステーションとの強い信頼関係のもとに協力し合い、ボランタリー組織の確立やグループの組織化を図った。

平成二十三年三月、東日本大震災が発生。この震災の影響で環境保全への取り組みの重要性が高まり、日本のエネルギー事業は大きな変革を迎える。

同年四月、広川石油株式会社を広川エナス株式会社と改称。「ENATH」とは「Energy」「Honesty（誠実）」「Earth（地球）」を組み合わせた造語であり、〝事業の柱となる石油・LPガスの販売を軸に、低炭素社会実現のための未来を見据えたエネルギーの総合商社を目指す〟という強い思いが込められている。広川エナスはあらゆるエネルギーのコーディネータとなるべく、環境エネルギー商品の開拓を目的としたECO事業専門部門を設置し、太陽光発電の提供、西日本で初となる震災対応型のSSの新設など、未来を見据えた事業展開を始める。

広川グループは地域の食料品やエネルギーの供給が途絶えてしまわないように、廃業する小売店を吸収合併することで供給の循環を守る取り組みを始める。また、小売部門「こころろ」「ふじうら」をオープンし、小売業の事業展開も強化を図っている。

広川エナス株式会社尾道支店

広川エナス株式会社広島支店

こころろ横川店

広川エナス株式会社横川SS

八代目雄一社長就任、新体制を整え、新時代へ

平成二十八年八月、七代目正一社長が広川株式会社会長に、廣川雄一が八代目社長に就任。エネルギーの進化や食料品の需給など、益々急速に変化していく時代の流れに対応していくための新体制を整えた。広川は延々と築き上げてきた歴史と教訓のもと、グループ企業、そして地域社会との強い絆をもとに、バランスのとれた企業へと進行、進化を目指している。

平成二十九年、広川は、創業百六十周年という区切りの年を迎えた。長い歴史の中には多くの困難があったが、常に地域に密着し、地域のお役に立ちたいという地道で誠実な精神が、難局を乗り切らせた。この精神を見失わない限り、広川は着実に発展することができると信じ、明日もまた地域に密着し続けていくのである。

広川グループ 160年のあゆみ

安政4年 1857		平田桂助が福本屋玉助に改名し "福玉"開業
明治2年 1869		1867.徳川慶喜が大政奉還を布告 二代目 廣川久助 社長就任
明治32年 1899		㋖廣川商店と改名
明治37年 1904	12月	三代目 廣川久助（鹿松）社長就任 1905 ポーツマス条約締結 1909 森永チョコレート販売
大正5年 1916		1914 第一次世界大戦勃発 ㋖廣川商店 全焼 1916 吉野作造が大正デモクラシーを指導
昭和11年 1936	3月12日	（株）廣川商店 設立 1936 二・二六事件
昭和14年 1939	6月	広島出張所開設（広島市楠木町） 四代目 廣川政太郎 社長就任 山陽煉炭を開始（煉炭・炭団） 1939 第二次世界大戦勃発
昭和20年 1945	8月	原爆被害 広島出張所全焼 1945 広島、長崎に原爆投下
昭和22年 1947	6月	広島出張所再開 1947 日本国憲法施行 1951 サンフランシスコ条約調印
昭和27年 1952	8月	日本石油（株）と特約販売契約
昭和30年 1955	7月	資本金を400万円に増資 広島出張所を広島営業所と改称
昭和31年 1956	3月	資本金を1,600万円に増資 1957 日本が国際連合に加盟
昭和34年 1959		コクサン印 廣川ブランドPB進出
昭和35年 1960	8月	広川ビル竣工（広島市西区横川町） 久助 死去 1961 ソ連が世界初の有人宇宙飛行に成功
昭和38年 1963	9月 11月	資本金を2,400万円に増資 五代目 廣川正雄 社長就任 1963 ケネディ大統領暗殺
昭和39年 1964	4月	（株）廣川商店から広川（株）に社名変更、 広島営業所を広島支店と改称 1964 東京オリンピック開催
昭和41年 1966	4月 6月 7月 11月	資本金を3,000万円に増資 正雄 死去 六代目 廣川滋 社長就任 広島食品課移転（広島市中区光南） 1966 ビートルズ来日
昭和44年 1969	3月	資本金を4,500万円に増資 1969 NASAが人類初の月面着陸に成功
昭和47年 1972	4月	本社移転 尾道から広島へ 1972 沖縄返還
昭和48年 1973	5月	岡山食品課開設 1973 日本全域に第一次オイルショック
昭和49年 1974	12月	尾道食品課移転（東尾道）
昭和54年 1979	6月	広島食品課増床
昭和59年 1984	7月	食材営業所開設（南吉島）
昭和62年 1987	5月28日	130周年記念式典 創業日を5月28日と定める
昭和63年 1988	3月	ヒロカワフーズ（株）設立 1988 イラン・イラク戦争停戦 1989 昭和から平成へ
平成3年 1991	11月13日	広川（株） 広川石油（株）分社 広川（株）――― 資本金4,500万円 従業員110名 広川石油（株）― 資本金9,500万円 従業員140名 1991 ソビエト連邦崩壊
平成4年 1992	4月	各営業所を支店に昇格 1992 日本人初の宇宙飛行士毛利さん宇宙へ
平成7年 1995	11月	尾道支店増床 1995 阪神・淡路大震災
平成8年 1996		SUGRA（新日本流通問題研究会）入会
平成10年 1998	1月 4月 8月3日 9月20日	全日食取り組みスタート開発事業所開設（土橋） 広川日石（株） 設立 （株）中国VMN 設立 食材営業所移転（安佐南区伴中央）食材広島支店に昇格 1998 長野オリンピック開催
平成11年 1999	6月 10月	全油種を取り扱うため、向島油槽所を整備（広川石油） 中国VMN島根センター開設 広川石油（株）の直営給油所を 広川日石（株）へ移管
平成12年 2000	7月	Vision70スタート 2001 小泉内閣発足
平成16年 2004	8月	七代目 廣川正一 社長就任
平成17年 2005	1月 3月	広川（株）岡山支店移転 食材岡山営業所開設
平成23年 2011	4月1日	広川石油（株）を広川エナス（株）と改称 2011 東日本大震災
平成24年 2012	7月	大川橋商店（株）設立 2012 第二次安倍内閣発足
平成25年 2013	3月 4月 10月	広川日石（株）「セルフ新浜SS」、西日本初の震災 対応型給油所として新設 （株）ふじうら設立 広川エナス（株）「あさひが丘SS」敷地内にてリペア （軽板金）事業新設
平成26年 2014	5月 7月	（株）野上石油店設立 広川エナス（株）「木之庄SS」開設 広川エナス（株）が尾道支店と福山支店を統合して 新事務所に移転
平成27年 2015	3月 7月	広川（株）の小売部門「こころろ横川店」オープン ハヤマ（株）を（株）エナスCSに商号変更
平成28年 2016	5月 8月 12月	広川（株）本社を広島市西区横川町から楠木町に 移転 八代目 廣川雄一 社長就任 さくらBIM（株）設立 2016 熊本地震
平成29年 2017	2月	旧本社跡地（横川町）に広川エナス（株）「横川SS」 リニューアルオープン

広川グループ